

「巻頭特集」 真宗高田派本山専修寺

# 国宝の御影堂と如来堂に詣でる

津市一身田町にある専修寺は、全国に末寺600余寺を擁する真宗高田派の本山です。浄土真宗の最大宗派である東西本願寺に並ぶ広大な境内を持ち、周囲は寺内町を形成しています。美しい蓮の花が境内を彩る7月下旬、国宝指定の御影堂と如来堂を訪ねました。

## 真慧上人が伊勢国内の高田派の拠点として建立

専修寺は、宗祖親鸞聖人が栃木県真岡市高田の地に、専修念仏の根本道場として建立した一字に始まります。一身田の専修寺は文明(1469〜1487)の頃、第10世の真慧上人が東海・北陸地方に布教を行うなか、伊勢地域の中心寺院として建てたもので、当時は無量寿院と称していました。

16世紀前半、高田の専修寺が兵火により炎上したことなどから、歴代上人が一身田に居住するようになり、やがて本山機能も移動します。数多い親鸞聖人の真筆類も移され、16世紀の末には「本山専修寺」として定

着しました。

本尊は「証拠の如来」と呼ばれる阿弥陀如来立像。「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えさえすれば、どんな悪事を働いても救われる、と教義をはきかへた考えが広まった際、真慧上人が比叡山に上つて真宗の正しい教えを説き、正当性が認められます。その証拠として贈られたのが快慶作の阿弥陀如来立像で、「証拠の如来」の由縁とされます。

専修寺の草創以来、天正8(1580)年と正保2(1645)年の2度、伽藍は火災に遭い、焼失しました。万治元(1658)年に津藩主藤堂家から土地の寄進を受け、その後約100年の歳月をかけて、諸堂が整備、再建されました。



如来堂の附として国宝指定された「如来堂御建立録」。完成までの概略経過や、高田派各寺院や門信徒が資金を集めた当時の様子が詳細に記されています



専修寺では参拝の記念として、御朱印(有料)を用意しています。また、オリジナルの御朱印帳を和紙専門店「村田紙店」と制作。伊勢振筆紙や黒谷和紙などを使った手作りの御朱印帳は種類も豊富で、境内「進納所」で購入できます

国宝の御影堂(右)と如来堂(左)。両堂に加えて、親鸞聖人の御廟も横一列に整然と並び伽藍配置も、専修寺の特徴です



## 国宝・重要文化財木造建築物では5番目の大きさ 清らかな蓮の花に映す極楽浄土

奈良や京都や都京、御宝の、この、田、を、し、い、す、ね



専修寺広報課 玉野章法さん

## 高い価値の寺院建築として 県内初の国宝建造物指定

正保2年の焼失後、伽藍の再建は御影堂から始まりました。このとき、御堂を東向きにするか、南向きにするかの問題が発生しました。焼失前の伽藍は南向きでしたが、浄土信仰が高まるにつれ、西方浄土に向かつて拝めるよう、御堂を東向きに建てる傾向が強くなり、それを取り入れるべきとする意見が出たのです。結局、一身田では東風が強く、参宮道が寺の南を通っていることなどから、南向きと決まりました。

寛文6(1666)年に完成した御影堂は、正面に三間の向拝を持つ入母屋造、本瓦葺の建物です。堂内の畳は780枚を敷き、国宝・重要

文化財木造建築物では5番目の大きさを誇ります。純和様の建築様式で、重厚感あふれる落ち着いた佇まいが印象的です。

御影堂の西に配置された如来堂の落成は、寛延元(1748)年でした。建築面積は御影堂の半分ほどながら、屋根を2層にして棟の高さをほぼ等しくしています。唐破風の向拝や華麗な彫刻など、禅宗様(唐様)の建築手法によつて建てられた仏堂です。そんな境内に並び建つ両堂の外観の対比は、参詣者の目をひきます。近世寺院建築として極めて高い価値を有していると、昨年11月28日に三重県内の建造物で初めて国宝に指定されました。

専修寺では、ほかにも昭和28年に国宝指定された親鸞聖人直筆の『西方指南抄』『三帖和讃』をはじめ、11棟の国指定重要文化財の建造物(山門、唐門、通天橋など)や美術品(絹本着色阿弥陀三尊像、紙本淡彩歌仙像など)など、数多くの文化財があります。

## 蓮のオーナー制度など 寺の知名度アップを図る

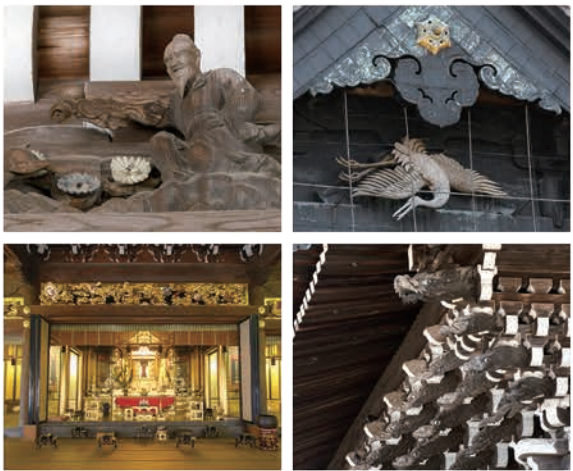
広報課の玉野章法さんは「御影堂と如来堂が国宝に指定され、参拝者

は増えていますが、知名度はまだまだ低いといわざるを得ません。たとえば名古屋では、専修寺を知っているという人は、1割に満たないレベルです。行政も国宝指定を機に、PRに努めてく、ださっています。専修寺としても国宝を活用しながら、いかに魅力を発信していくかを、考えていく必要があります」と課題を語ります。

その一環で取り組んでいるのが「蓮の寺」です。現在、境内には35種類135鉢もの蓮があり、その数を3倍ほどに増やして、蓮の咲く寺として認知されることを目指します。蓮を増やすと共に維持管理のため、蓮のオーナー制度「高田山・蓮の会」を始めました。オーナーとして鉢に名前が掲げられるほか、国指定重要文化財対面所でのお抹茶の会招待や、株分けなどの特典付きで、登録期間は1年です。

「毎朝7時からの如来堂と、その後の御影堂でのお勤めと説教には、どなたでもご参加いただけます。また有料(500円)となりますが、事前にお申し込みいただければ、教義や歴史、見どころなどを僧侶がご案内いたします。ぜひ専修寺に一度足をお運びください」と玉野さんは呼びかけます。

## 如来堂の見どころ



- 左基五部の作と伝わる鶴の妻飾り。この鶴は夜になると、ここを飛び立って蓮池に下り立つ、という伝説が残っています
- 屋根の荷重を受ける、尾垂木(おだるき)という部材の先端には象・龍・摸の彫刻が施されています
- 屋根の下層の裏殿(かえるまた)には、中国の故事に基づいた人物の彫刻が組み入れられています。全部で24体あり、写真は「瓢箪から駒」です
- 本尊の阿弥陀如来立像が安置されており、教義上、如来堂が本堂となります。ですから如来堂、御影堂の順に参拝しましょう。金箔などで華やかに裝飾された欄間の彫刻は、阿弥陀経が描く極楽浄土です。御影堂と同じく、如来堂の宮殿も附として国宝に指定されています

## 御影堂の見どころ



- 御影堂の正前面の外廻り組物には、龍の彫刻が用いられています。向拝周辺に施されている彫刻は色彩豊かで、見応えがあります
- 宗祖親鸞聖人の木像を安置しており、宮殿(くうでん)も附として国宝に指定されています。正面に掲げられている額の「見真」とは、明治天皇が親鸞聖人に追贈された「見真大師(けんしんだいし)」の諡号に基づいたものです
- 真宗高田派の紋「柳葉菩提樹」。親鸞聖人の夢に明星天子が現れ、現在の栃木県真岡市高田に柳を植え、菩提樹の種を蒔き、寺を建てるよう告げたと伝わります。この専修寺建立の伝説にちなんだ寺紋で、御影堂の前には、東に柳、西に菩提樹が植えられています
- 堂内には菊の御紋が見られます。後土御門天皇から朝廷の祈願所と定める論旨を下付されており、また歴代住持に皇族を迎えています